日本ホメオパシー医学協会〈JPHMA〉会長
由井 寅子（ゆい とらこ）

ホメオパシーの真実

1953（昭和28）年、愛媛県生まれ。33歳のとき潰瘍性大腸炎を患うが、ホメオパシーで劇的に改善。プラクティカルホメオパシー大学大学院（英国）卒業、Hon. Dr. Hom/Ph. D. Hom（ホメオパシー名誉博士・ホメオパシー博士）。日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）会長、カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（CHhom）学長。ホメオパシー学術誌『The Homoeopathic Heritage International』B. Jain Publishing Houseの国際アドバイザー。ホメオパシーの実践と、ホメオパシーの創始者・ハーネマン研究は世界的に評価され、21世紀のホメオパシーをけん引する指導的なホメオパスとして、ますますの活躍が期待されている。著書、論文、訳書多数。
【日本ホメオパシー医学協会】
http://www.jphma.org/
【カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（CHhom）】
http://www.homoeopathy.ac/
【連絡先】03-5779-8005

ホメオパシーとは何か？

「ホメオパシー」（同種療法）とは、今から200年前にドイツのハーネマン医師（※1）が確立した医学体系です。「熱には熱を生じさせる薬草」というように、あえて同じものをとることで病的状態を体と心に認識させ、体に備わっている自己治癒力を呼び覚まし、根本的に治癒させる療法です。

対照的なのが現代西洋医学で行われている「アロパシー」（異種療法）で「熱には解熱剤」というように、反対のもので症状を抑圧しようとする対症療法です。

ホメオパシーでは「レメディー」と呼ばれる砂糖玉を使用します。これは、動物、植物、鉱物などを、

※1　ハーネマン医師（Samuel Christian Friedrich Hahnemann, 1755～1843）：ドイツの医師でホメオパシーの提唱者。

たとえば30C（10の60乗倍）という天文学的レベルまでアルコールで希釈・振盪（しんとう）（揺り動かす）したものを染みこませたもので（※2）、原物質は1分子もありません。

しかし、これらは人間や動物に明らかな治癒効果を発揮します。また植物にも有効です。原物質がないのに、なぜ治癒効果があるのかの科学的な解明は未（いま）だなされていませんが、液体に物質情報が何らかの形で保存されていると考えられています。

ホメオパシーでは「病気は生命力の滞り」と考えますが、同種の病的パターンをもつレメディーは、共鳴によってその病気に直接的に作用できると考えています。

たとえば、トリカブトというキンポウゲ科の植物から作られるアコナイトという名前のレメディーは、急性のショックや恐怖に陥っている人に指示されます。恐怖にとらわれている人は、自分が恐怖にとらわれていることに、本当の意味で気づいていません。

そこに恐怖のレメディーを与えることで、病気とレメディーが共鳴・増幅し、自分が恐怖にとらわれていることに気づき、落ち着くことができるのです。

レメディーというのは、自己を映す鏡のような役目と言えるでしょう。小さな枠（自分）から本来の自分に連れ出してくれるものです。

このホメオパシーは、英国では王室御用達の健康法で、インドでは70％の人口がホメオパシーを使っています。その他、ホメオパシーが特に盛んに行われている国・地域は、EU諸国（英、独、仏、伊、ベネルクス3国、北欧他）、スイス、インド周辺諸国（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ）、中近東（イラン、イスラエル）、中央アジア、ロシア、中南米諸国（ブラジル、キューバ他）、マレーシア、南アフリカ、オーストラリア、ニュージランドなどです。また米国、カナダなどにもホメオパシーの協会があり、ヨーロッパでは、英国をはじめ、フランス、オーストリア、ハンガリー、アイルランド、

※2　**希釈の単位**：X→「10倍希釈」を繰り返した回数。例）10倍希釈を9回→9X、C→「100倍希釈」を繰り返した回数。例）100倍希釈を200回→200Cと表現される。最もよく用いられるのは30C（100倍希釈を30回）つまり、$100^{30}=10^{60}$倍に希釈したもの。

イタリア、ラトビア、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、オランダなど、南米では、ブラジル、メキシコ、アジアでは、インド、パキスタン、スリランカなど多くの国で医療保険の適用がなされており、世界で推定10億人が親しんでいる、漢方の次にポピュラーな療法なのです。

ホメオパシーは「代替医療の切り札」と言われていますが、本来は、現代医学に匹敵する治療体系をもつ、「もう一つの医学」と言えるものです。事実、200年にわたる膨大な疾患の治癒実績は誰も否定することができないものです。

もちろんホメオパシーは急性・慢性疾患だけでなく、予防医学、健康増進、事故やケガ、心や感情の問題、ショックやトラウマ、家庭のセルフケアなどにも大きな力を発揮します。さらに、原物質を含まないために、副作用がいっさいなく、赤ん坊や妊婦さんでも安心して使うことができるとともに、常習性をもたず、安価であるということも利点としてあげられます。

予防接種の実際

多くの方々は予防接種を「すばらしいもの」というイメージでとらえていると思います。事実、過去に天然痘撲滅宣言が大々的に喧伝(けんでん)されたように、予防接種は現代医学の勝利の象徴として、神話にまで高められています。

私も昔はそう思っていました。また、生まれたばかりの赤ん坊や、まだ免疫の弱い子どもに対しては、予防接種をしなければ病気から体を守れないと考えている方々が大半なのではないかと思います。

しかし真実は全く異なります。

予防接種の予防原理を簡単に説明すると、予防しようとする感染症の病原体を弱毒化させたものや病原体の一部、あるいはその病原体のもつ毒素を皮下注射で体内に入れることで、強制的にそれに対する抗体（IgMやIgG抗体（※3））を作らせ、

※3　**IgM**：Immunoglobulin M（イムノグロブリンM：免疫グロブリンM）リンパ球の一種であるB細胞に存在する抗体。ヒトの抗体中サイズが最大。
IgG：Immunoglobulin G（イムノグロブリンG：免疫グロブリンG）免疫グロブリンの70−75%を占め、血しょう中に最も多い抗体。

感染しても発症しないという理屈です。しかし抗体＝免疫という前提が間違っているのです。

ＩｇＭやＩｇＧ抗体というのは、異物（病原体や毒素など）が体内に大量に侵入してきたときに、生命の危機を避けるために、とりあえず異物にくっついて無毒化するために作られる抗体です。

キラーＴ細胞などは、抗体とは無関係に異物を認識攻撃します。キラーＴ細胞、ＮＫ細胞、マクロファージ、好中球などでしっかり対処できていれば、あえて予防接種で抗体を人工的につくる必要はありません。これらの免疫細胞が異物や毒素をうまく処理できないときに、非常手段としてＩｇＭやＩｇＧ抗体が作られるということです。

また、健康であればすみやかに異物は排出され、それに伴って抗体も減少していきます。したがって、ワクチンによって抗体を作らせ、それを何年も永続的に血液中に存在させるためには、抗原（病原体や毒素）が体に残存していることが前提となります。

しかし「血液中に異物が残存し排出できない状態」というのは、免疫が低下している状態であり、抗体が長期間にわたって存在し続けるというのは、本来異常なことなのです。

したがって、抗体が何十年も存在し続けるように開発されるワクチンは、皮肉なことに「いかに免疫を低下させるか」がカギとなります。

ワクチンにはさまざまな異物（抗生物質、有機水銀、アルミニウム塩、ホルムアルデヒドなど）や異種タンパク質（培養組織由来のさまざまな動物タンパク質）、異種微生物（培養組織由来のさまざまな微生物）、抗体生産を目的とする病原体や毒素、化学物質（安定剤など）が含まれており、それらが血液中に一度に入ってくることで免疫系は混乱します。

すると、ＩｇＭとＩｇＧ抗体を作るＢ細胞での抗体生産活動が（免疫活動の）メインとなり、キラーＴ細胞などの免疫細胞の活動が抑圧され、抗体が結合した異物を排泄することができなくなってしまうのです。それがすなわち「（ワクチンによって）血液中に異物が存在し続ける」という事態です。

そうすると、身体はこれ以上同じ異物が外から入ってこないように、粘膜や皮膚での見張りを強化するためにＩｇＥ抗体（※４）を作り、それらの異物が接触すると肥満細胞（※５）から一斉にヒスタミンなどを放出して炎症を引き起こします。これがアレルギー反応と言われるものです。腸でこのような炎症が起こると未消化のタンパク質（※６）が体内に侵入しやすくなり、いろいろな食べ物にアレルギーを起こすようになってしまいます。アレルギーの根本原因は免疫力の低下にあるのです（※７）。

このように、免疫系を混乱させ、大量の抗体が作られることで、何十年もキラーＴ細胞、ＮＫ細胞、マクロファージ、好中球などの免疫系が抑圧され（※８）、ＩｇＭやＩｇＧ抗体を常在させるのが予防接種というわけです。そして、それをより強固にするために、（ワクチンには）水酸化アルミニウムなど「アジュバント」（※９）と呼ばれる、免疫増強剤が添加されます。

「免疫増強剤」と聞くと何か免疫を向上させるものという印象をもちますが、実際は「抗体を作らせやすくするもの」という意味で、これは「抗体形成＝免疫獲得」という間違った前提に基づく名称です。「抗体を作らせやすくするもの」という意味では、それだけ免疫を低下させるものであり、本来「免疫減退剤」と呼ぶべきものです。

一方、ＩｇＡ抗体（※10）は、気道や腸管などの粘膜にあり、異物を捕らえ体内へ侵入するのを防ぐ役目を担っています。したがって、ＩｇＡ抗体はたくさんあってもよいわけです。したがって、ひとくちに「抗体価」といっても、検査でどの種類の抗体価を調べるかが重要になるわけです。

一度かかると生涯免疫をもつと言われる「はしか」は、過去にかかった人は抗体価が高いと言われますが、実際は血液中のＩｇＭやＩｇＧ抗体価は低いのです。逆にはしかの予防接種をした人のＩｇＭやＩｇＧ抗体価は高いのです。

したがって、予防接種によって達成される「予防」とは、最初から血液中に病原体や毒素が存在し続けることによってできた抗体によるものです。

ですから、予防接種の本質とは「急性病を発症することがないように、最初から慢性状態を作る」ことにあると言えますので、このように健康を犠牲にして達成される予防はナンセンスと考えます。

これを裏付けるように、ワクチンが免疫力を低下させる証拠は山ほどありますが、ワクチンが免疫力を向上させる証拠は皆無です。

一般的には、様々なワクチンによって人間の命が救われてきたと考えられていますが、実際は、子どものかかる病気をはじめとする感染症のほとんどが、予防接種が導入される前に衰退していたという事実があります。19世紀以降、感染症による死亡率が急激に減少した理由は、ひと言でいうと生活水準が向上したためです。上下水道が整備され、衛生状態・栄養状態が改善され、貧困や飢えが減り、労働条件が決定的に変化して安定した生活が手に入るようになったことが大きな要因です。

天然痘もワクチンで撲滅したと言われていますが、きちんと調べるとワクチンによって被害が拡大延長

※4　**IgE抗体**：Immunoglobulin E（イムノグロブリンE：免疫グロブリンE）哺乳類にのみ存在しアレルギー反応において中心的な役割を果たす。

※5　**肥満細胞**：哺乳類の粘膜下組織や結合組織などに存在する造血幹細胞由来の細胞。ランゲルハンス細胞とともに炎症や免疫反応などの生体防御機構の役割を持つ。

※6　**未消化のタンパク質**：タンパク質は、正常な状態であれば、消化器で完全に消化され、アミノ酸にまで分解されて血液中に入る。しかし何らかの事情で消化が完全に行われないときには、アミノ酸レベルまで分解されないまま血液中に入る可能性もある。アミノ酸レベルにまで完全に消化されていない場合には、危険な異物となり、アレルギーの原因となりえる。

※7　アレルギーの根本原因について、西洋医学では「免疫反応の過剰」と言われているが、免疫が過剰に反応する原因は、血液中の異物の存在にある。「異物を排泄できない状態」、すなわち「免疫力の低下」が、アレルギーの根本原因と言える。

※8　免疫系に限らず、生体は拮抗する二つの回路をもち、一方が他方に抑圧的に働く仕組みになっている。B細胞（骨髄由来のリンパ球細胞。抗原の侵入に応答して増殖し、抗体、つまり免疫グロブリンを生産する細胞へと分化する）の抗体生産が優性であるとき、キラーT細胞などの免疫系は抑圧的に働く。

※9　**アジュバント（adjuvant）**：抗原性補強剤とも呼ばれ、抗原と一緒に注射され、その抗原性を増強するために用いる試薬のこと。

※10　**IgA抗体**：Immunoglobulin A（イムノグロブリンA：免疫グロブリンA）消化管や呼吸器における免疫機構の最前線として機能するほか、分泌型IgAは初乳中にも含まれ新生児の消化管を細菌やウイルス感染から守る働きを有している（母子免疫）。

されていることがわかります。ワクチンが使われなかったら、もっと早くに撲滅されていたでしょう。

ワクチンの二重盲検法による効果の試験は、されていません。唯一行われたBCGの二重盲検法による試験からは、「ワクチンには効果がないばかりか悪影響ばかりがある」ことが判明しています。

いっぽうで、子どものかかる病気には意味と役割があります。それらの病気にかかることによって、子どもたちは生来抱える遺伝的な「マヤズム」(※11)の負荷を軽減させることができ、ひと皮むけて身体的にも精神的にも成長を遂げ、生きる力を強くし、後の人生を楽に生きていくことができるようになるのです。

また、母親の血液や母乳から受け継いだ毒を浄化し排泄するために、適切な時期に子どもは病気にかかるようになっています。また、子どものかかる病気をはじめとする感染を通して、子どもたちは感染症の克服のしかたや、免疫をうまく働かせることを学習するのです。言ってみれば、子どものかかる病気は、ステップを踏んで免疫を働かせる学習教材となっているのです。

予防接種をすると逆に血液中に異物が注入されて血液が濁り、その血液の濁りが生命の流れを滞らせ、新しい「こだわり」をつくりだしてしまうのです。

たとえば、予防接種ワクチンの中には、有機水銀やアルミニウム塩などが入っていますが、これらがもつこだわりが自己に投影され、怒りっぽくキレやすくなり、ナイフに魅せられ、どうしてもそれを使いたくなる子どもや大人が増えているという側面が考えられます。青少年の犯罪が増えたのは水銀やアルミナ(※12)が原因かもしれません。

ここまで予防接種について述べてきましたが、詳しいことは拙著『予防接種トンデモ論』や『それでもあなたは新型インフルエンザワクチンを打ちますか?』をお読みください。

※11 **マヤズム(miasm)**:先祖から受け継いだ「負(病気)の土壌」というホメオパシーの考え方で、歴史的・遺伝的・肉体的・精神的要素を含む。

※12 **アルミナ**:ボーキサイトなどから製造するアルミニウムの精錬原料・酸化アルミニウム(Al_2O_3)の通称。

予防接種と発達障害の関係

私が現在力を入れているのが自閉症・注意欠陥多動性障害・アスペルガー症候群をはじめとする発達障害です。

ホメオパシーによって多くの発達障害の子どもの症状を改善させてきましたが、日本で健康相談を始めた当初は、思うように成果が上がりませんでした。そして調べるうちに、予防接種と関係があることが徐々にわかっていきました。

日本では明治以来、子どもたちに多種の予防接種を義務づけてきましたが、その結果、親子代々病気にかかりきれず、免疫が弱いまま現在に至っていること、さらに予防接種ワクチンに含まれるさまざまの化学物質や動物由来のタンパク質を体内に蓄積させてしまっていることが推察されました。

そこで、子どもたちにBCGやDTP（三種混合ワクチン）、ポリオなど8種類のワクチンから作ったレメディーを使用したところ、それまでロボットのように感情を出せない自閉症の子どもが、感情表現をするようになっていきました。

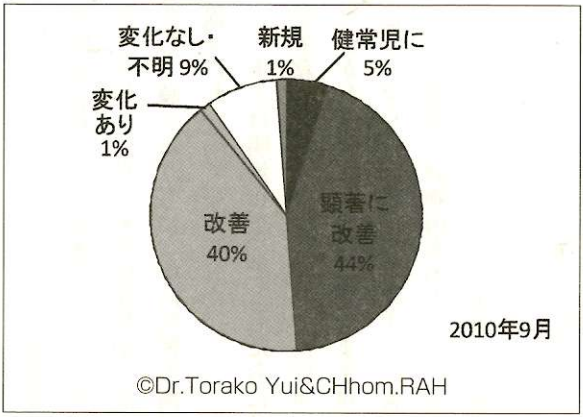
ちなみに私の発達障害のクライアントのほとんどは男の子ですが、その原因として、発達障害にかかわる遺伝子が、性染色体であるX染色体にあるためではないかと考えています。

すなわち、X染色体に問題があった場合、女性はXXのX染色体が2個あるために代替がききますが、男性はXYとX染色体が1個しかないために発症する率が高くなるのではないかということです。

X染色体には、言語、感覚、感情に関する遺伝子が含まれています。ホメオパシーでは、物質的遺伝子を形成する大元（おおもと）のエネルギーコードを修正することで、遺伝子の問題でも改善し得ると考えています。以下に症例を紹介します。

【3歳・男児】

主訴：2歳児。言語の遅れがあり声が言葉になら



【図】由井氏がかかわった発達障害の認められるクライアントの児童や幼児82名における、ホメオパシー治療を受けた改善結果。
※これらのケースは、英国、ドバイ、ドイツ、ベルギーでのホメオパシーカンファレンスで発表。
自閉症・注意欠陥多動性障害・アスペルガー症候群などの児童や幼児82名のケース……89%が改善。

ない。多動。頭が大きく体は細く小さい。知的発達も1歳以上の遅れがある。自分のしたいことを伝えられず癇癪を起こす。母親は愛情を伝えられず困っている。

処方：Merc-sol（マーキュリーソル：水銀）、Calc.（カルカーブ：牡蠣の殻）、9種類のワクチンレメディー。

マーキュリーソルを選択したのは、上記症状（言葉が出ない、多動、キレやすいなど）の多くは水銀の症状を暗示しているからです。カルカーブを選択したのは、私のホメオパシーの体験上、カルシウムが不足した場合、言葉が出にくいことが多くあったためです。

結果：3回目の相談会を行った7ヵ月後に言葉が出るようになり、感情も出せ、そのうえ、知能指数がIQ＝106になり、4歳の子どもの平均より高いIQになった。健常児と同じ状態になった。母の愛情がわかるようになった。母親もこの子を本当にかわいいと思えるようになった。

自閉症児をかかえる母親は異口同音に、ロボットのようだったわが子が、愛情をかけるとそれを返してくれ人間らしくなったことがとにかく嬉しい、と言い、ほんとうに皆さん喜んでいます。発達障害の

治癒症例については、拙著『発達障害へのホメオパシー的アプローチ』に詳しく紹介していますので興味のある方は読まれてください。

その後も臨床経験を重ね、現在82症例の発達障害の子どもたちを見ており、その結果を【図】に示します。

しかしだからといって私は、予防接種に反対しているわけではなく、予防接種をする・しないの判断はあくまでも本人、もしくは子どもであれば親がするものであると考えていますし、同様に、ワクチンを作る・作らないも製薬会社の自由であると考えており反対していません。

もちろん、国民は1994年の予防接種改定法により、予防接種が義務から任意になりましたので、自分で選択することができます。しかし、予防接種や薬で副作用や副反応があるものは、気をつけて使うべきであると考えます。

そして、もし予防接種を打って副反応や副作用など種々の問題が生じたとしても、ホメオパシーにはその解決方法があることを多くの人に知ってほしいと思っているだけです。

食と環境に含まれる異物の解毒方法

確かにワクチンは不自然な異物の代表ですが、もちろん、それだけではありません。私たちの身の回りには不自然な人工物が溢れており、飲食物や空気中にも多くの不自然な物質が含まれています。

ホメオパシーの素晴らしいところは、飲食物、空気、あるいは薬として体内に取り込んだ不自然な物質を体内から排除する方法であるということです。

免疫力（自己と非自己を認識する力）が高ければ、異物が腸で吸収されることはないでしょう。しかし現代、さまざまな要因で免疫力が低下している人が多いのが実情です。そして加工食品など生命力のないものばかり食べていると、やはり生命エネルギーも低下し免疫力も低下してしまいます。

そうすると飲食物に含まれる異物も体内に侵入し

やすくなり、それが日常化すると排出することができなくなってしまいます。そして、非自己（異物）に相当する偽りの自己、こだわりの心を抱えてしまうことになります。飲食物や環境が心を作るということもあるのです。

このような異物や老廃物がある一定以上蓄積すると、体の自浄作用（自己治癒力）が働いて排泄しようとします。これが本来「急性症状」と言われているものです。

発熱も下痢も発疹も鼻水も咳も、本来排泄のための症状で、ありがたいものなのです。しかしその急性症状を抑圧してしまうと何が起こるでしょうか？

本来排泄すべき老廃物、ゴミを排泄できないということですから、体の中はゴミ溜めになってしまいます。せっかく体の大掃除をして心と体をきれいにしようとしているのにその症状を止めてしまったら、ゴミを排出することができず、非自己を自己とする方向でバランスをとらざるを得なくなってしまいます。

こうして血液は濁り、細胞も変異し、やがてがんが作られることになってしまいます。

こういう不自然な物質を体から排泄するためには、免疫力（自己と非自己を認識する力）を高めることがいちばんです。異物を排出できないのは異物を異物として認識できないからであり、異物を異物として認識させるために、異物から作った同種のレメディーをあたえるホメオパシーは、直接的にピンポイントで免疫力を高め、特定の異物の排泄を促進するという点で大変優れた方法です。

特定の異物が原因で病気になっていることがわかっているのであれば、その解毒方法としてホメオパシーに勝る療法はないかもしれません。

現在、塩素水から作られたレメディー（クロミュームアクア：Chlor.）をはじめ、Asbes.（アスベスト）、Diox.（ダイオキシン）、Exha.（排気ガス）、Formal.（ホルムアルデヒド）、Artsweet.（人工甘味料）、TobacS.（タバコの煙）、その他、人工着色料、漂白剤、環境ホルモン、ヘアカラー、整髪料、除草剤、

台所用・洗濯用合成洗剤、マーガリン、携帯電磁波、防虫剤、生理用品、制汗剤、塗料、シリコン樹脂などから作られたさまざまなレメディーが販売されており、セルフケアで解毒できるようになっています。

ただし、症状を抑圧する薬や多くの化学物質や重金属を混合したワクチンの場合はそのように単純にはいきません。

過去に症状を薬で抑圧したことがある場合、マヤズム（病気を作る土壌）が立ち上がり、薬のフタとも言うべき層ができてしまっていて、そのフタが取れないためにいつまでも症状が出続けることが多いのです。そういう場合は薬のフタを取るための医原病（医療行為が原因で生ずる疾患）アプローチとマヤズム理論をしっかりと理解していないと現代の複雑な疾患には太刀打ちできません。

ですから、慢性病の場合は、自分の判断でレメディーをとらずに最初からホメオパス（ホメオパシーの行為者）に相談してほしいと思っています。そうでないと好転反応の症状が出続け、自分の手に負えなくなり、結局病院に行って再び薬で症状を抑圧することになってしまうケースが多いからです。

これはとても残念なことです。日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）は、認定ホメオパスによる健康相談を全国２５０ヵ所（２０１０年3月1日現在）の「日本ホメオパシーセンター」にて行っていますので、ぜひご相談ください。詳細はホームページをご覧ください。

一方で慢性病にならないために、皆さんに急性症状が出たときにホメオパシーのホームキットから素早く適合するレメディーをとって健康を取り戻せるよう、ぜひセルフケアの勉強をしてほしいと願っています。

統合医療の重要性

現代の病理は予防接種、症状の薬による抑圧、環境、インナーチャイルド（※13）、ストレス社会など実に多くの問題が複雑に絡み合って大変複雑な状況となっています。その結果、心身の慢性病に苦しむ

※13　**インナーチャイルド**：無視され、傷ついた「過去の内なる子ども」が人間の精神的苦痛の根源になるという考え方。

人々、赤ん坊や子どもでも生まれつき虚弱な人々、発達障害の子どもたちなど、確実に複雑で難しいケースが増え続けています。

このような複雑で難しいケースを治癒に導くためには、前述した通りマヤズム理論と医原病アプローチの徹底した理解が不可欠なことはもちろん、ホメオパシーのみならず統合的なアプローチが必要になる場合もあります。

とくにがんをはじめとする肉体レベルの疾患においては、ホメオパシーのみならず、肉体的なアプローチも必要になってきます。

そうした背景のなか、私たちは日本で13年間行ってきたホメオパシーの教育機関「ロイヤル・アカデミー・オブ・ホメオパシー」（RAH）を発展させた教育機関の立ち上げを計画、複雑で難しいケースに苦しむ多くの人々を治癒に導く優秀なプロフェッショナル・ホメオパスを養成し、世に送り出すことを目的とした「カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー」（CHhom：シーエイチホム）は2010年5月に開校しました。

もともとホメオパシーは「体・心・魂」を三位一体として治癒に導く療法ですが、統合医療を掲げるCHhomでは、さらなる統合、すなわち、

現代医学とホメオパシー医学の統合（体）
心理学とホメオパシー医学の統合（心）
霊性とホメオパシー医学の統合（魂）

を目指しています。そして体・心・魂の病気をさまざまな角度から治癒に導くために、ホメオパシーにプラスして、

【体へのアプローチ】

臓器療法、生命組織塩療法、マザーチンクチャー、薬草ハーブ療法、ハーブ蒸し風呂、体操、リンパマッサージ、食養生、ホメオパシー自然農法を学び、

【心や魂へのアプローチ】

スパジリック（錬金術によるレメディー）、フラワーエッセンス

を学びます。私のもとで、ホメオパシー統合医療による真の治療家を目指したいという志ある方は、ぜひCHhomにおいでください。

心の問題（インナーチャイルドやトラウマ）

ホメオパシーやホメオパシー的生き方を通して、インナーチャイルドやトラウマを癒すことができます。人は体・心・魂の三位一体であり、心の問題が肉体の疾患となって、あらわれることが多いのです。

したがって日頃、心や感情にどのように対処してきたのか、見て見ぬふりをしたのか、しっかり見つめて乗り越えたのかが、病気になるかどうかの境界線になるわけです。

日々、悲しかったり、つらかったりと、心が「つまる」ことがあったときは、まず自分自身を見つめる作業をしてください。

そして、つらかったら、同種のレメディーを取られたらいいと思うのです。レメディーは、こだわりの心を押し出そうとする人に協力してくれるでしょう。そして、そのつど心の問題の解決をしていけば、体が病気になることはないと思うのです。

私の相談会に来る方々というのは、いろいろな意味で「大変な病気」を抱えている人がほとんどですが、皆さんが治る過程の中で、共通して話されることがあります。

「私は小さいころに虐待されたのです」「私は小さいころに無視されて、親から全然愛されていないのです」「私は一度も弱音を吐けませんでした」「母親の苦しみをおもんぱかって、自分の苦しみが言えませんでした」など、子どものころに傷ついた痛みを話し始めるのです。

小さいころのトラウマや、傷ついたインナーチャイルドが置き去りにされたまま、何年も何年も自分の心を見ないでいた結果、こんなにも彼らの体がコチコチになり、病気になってしまったんだということがわかったのです。

15年もホメオパスをやっていると、病気がどのよ

うにしてつくられるのかが、おのずと見えてきます。人間はどういうところで行きづまり、その結果どういう病気になるのか、そういうことが見えてくるのです。やはり私たち自身が、自分の体、自分の心、自分の魂というものを守っていかなければいけないのです。自分以外に自分自身を救える人はいないのです。「自らが病気をつくる」ということを、しっかり理解していただきたいと思います。

結局、生命力の滞りが病気そのものですが、愛されず傷ついたインナーチャイルドは、それそのものがひとつの病的パターンを形成し、そこから怒り、悲しみ、恐れ、嫉妬などの感情が生じてきます。

ですから、それらの感情やインナーチャイルドを探ることはすなわち病気を探ることであり、同時に同種のレメディーを探ることなのです。

そして心の病的パターンに合うレメディーを与えることで、そのこだわりが解放され、楽に生きられるようになります。カウンセリングなどでこのようなインナーチャイルドやトラウマを解放するには、通常何年もかかるものだと思いますが、ホメオパシーを併用することで驚くほど短期間で変化していくことができます。

ただし、レメディーだけに頼るのではなく同じパターンに陥らないようにするためにも、しっかりと自分のインナーチャイルドを見つめ、受け入れ、愛していく作業をしていくことが重要です。インナーチャイルドに関しては拙著『インナーチャイルドが叫んでる！』をお読みください。

生き方・考え方と病気の関係

さきほど、予防接種や飲食物、環境毒の話をしましたが、よく考えなければならないことは、予防接種を打っても皆が病気や体調不良になるわけではない、ということです。病気になる・ならないは、予防接種など以外にも何らかの要因があるということです。

同様に、ホメオパシーで治る人と治らない人がいるように、治る・治らないというのもまたホメオパ

シー以外に何らかの要因があるということです。

その何らかの要因というのは、私が考えるに、やはり生き方、考え方が一番大きいのではないかと思うのです。気づかなければならないことがあるから病気になり、気づくことで治るというのが、私の臨床経験から言えることなのです。

ですから、私は病気というものは単に治ればよいというものではなく、治る過程が大事であると考えるのです。もし治療家がただ単に患者の病気を治したら、おそらくその治療家は患者のカルマを受け取ることになってしまうでしょう。

病気を治すということは、本来それだけの責任を伴うものなのです。一方、患者は何も学習していないので、いずれ（今世か来世以降かわかりませんが）同じテーマでつまずき学習することになるでしょう。

理由があって病気になっているのですから、本来その原因を解決することなく病気を治してよいはずはないのです。必要があって病気になっているということを治療家も患者も理解する必要があります。何か気づく必要があるということなのです。まさに「病気はお知らせ」です。「生き方、考え方がどこかで間違っていますよ、修正する必要がありますよ」という、お知らせなのです。

病気をそのようなものと考えると、同種の刺激で気づきを促し、自然治癒力を触発するホメオパシーは、この「お知らせ」としての病気の意味を自覚するのに最適な療法といえます。

ホメオパシー療法を受けた人が生き方、考え方が大きく変わる経験をすることもめずらしいことではありません。しかし心底自分の間違いに気づかなければ、同じ過ちを繰り返すことになってしまいます。自分以外に誰かが代わりに気づくことはできないのです。ホメオパシー的生き方については拙著『とらこ先生通信』をお読みください。

私たちの責任

ところで病気には、現代医療の治療自体によって

引き起こされる医原病というものがありますが、これとて私たちの側に、そもそもの原因を求めることができます。

「苦しみはいやだ。症状はよくない。病原体は悪い」。このような考えである限り、私たちが安易に薬を求める心がある限り、苦しみを避け楽になることばかりを求め続ける限り、唯物的（ゆいぶつてき）な考えばかりを信じ、目に見えないものを信じない限り、薬はつくられ、症状は抑圧され、ワクチンはつくられ、打たれ、いずれは病気になってしまうと思うのです。

そういう心がある限り、新薬は開発され続け、使われ続け、症状は抑圧され続け、ワクチンは開発され続け、それを打ち続けなくてはならないのです。それを私たちが求めているからです。そのような心を私たちが抱えている限り、ワクチンは自分を映す鏡としてつくられなければならないのです。

人工物があふれる今の世の中は、人工的なものが体に入ったことの結果です。人工的な食べ物を食べたり、環境汚染を続けたりした結果だと思うのです。

食べ物は単なる化学的な栄養補給ではありません。千島学説（※14）で言われているように、食べ物がそのまま赤血球となり細胞となるのです。ですから食べ物が不自然になれば体も自然ではいられなくなり、体が不自然になれば心も自然ではいられなくなります。

人工的な化学物質の入った注射を打つこともそうです。病原体が鏡の役割を果たしているように、ワクチンや薬剤は「鏡」の役割を果たすのです。予防接種も、病気になってその愚かさを知り、考え方を変える可能性を与えるものということでは同種療法なのです。

実際、私はワクチンや薬害で苦しむ多くの人々がそれを通してホメオパシーと出会い、生き方・考え方を変え、本来の自分を取り戻し幸せになっていった多くのケースを見てきました。とても不思議な思いにとらわれました。

ワクチンは本当に悪いのだろうか、薬剤は本当に悪いのだろうか、現代医学は本当に悪いの

※14　**千島学説**：生物学者千島喜久男が、1963年から提唱した「赤血球は体細胞の母体である」（赤血球分化説または赤血球一元論）をはじめ8つの原理から構成される学説。2010年12月号132～151ページに、長 正司氏より千島学説に関するご寄稿をいただいております。

だろうか、製薬会社は本当に悪いのだろうか。そんなことを考えるようになったのです。

それは単に私たちの心の反映ではないのだろうか？　そうであるならば、責められなければならなのは現代医学でも製薬会社でもなく、私たち一人ひとりの心の持ち方、あり方・考え方ではないだろうか？　現代医学が悪い、製薬会社が悪いと言って責めても根本的な解決にならないのではないか？　それこそ対症療法ではないか？　そのように考えるようになっていきました。世の中で起こることは私たちの心の反映であり、私たちが真剣に自分を生きたら世の中は変わると思います。

ホメオパシーバッシング

昨年夏から、ホメオパシー叩きを意図したと思われる一連のマスコミの報道（ホメオパシーバッシング）がありました。山口でビタミンK2シロップをとらなかった新生児と東京都のリンパがんの女性の2件のホメオパシー利用者の死亡を、あたかもホメオパシーが原因で死亡したようにマスコミが報道し、それに不随して、「ホメオパシー＝危険、死亡、毒、医療ネグレクト、違法」などの、事実でない報道がなされました。また、日本学術会議が会長談話でホメオパシーを非科学的と決めつけ、発表したことで、医療、助産、学術の分野からホメオパシーが追放される結果となりました。

今回、一連の事実を歪めた報道に、多くの方が翻弄され、ホメオパシーに対してマイナスイメージをもってしまいました。海外ではホメオパシーは「もう一つの医学」と言われるほどの優れた療法であるだけに、多くの日本国民がホメオパシーを誤解してしまったことをとても残念に思います。

詳細は、日本ホメオパシー医学協会のホームページに掲載されている『ホメオパシー新聞』（http://www.jphma.org/より閲覧できます）をぜひ、お読み頂ければと思います。もちろん、すべてのマスコミがそうだというわけではありません。

ホメオパシーの有効性に関するメカニズムはまだ解明されていませんが、ホメオパシーの有効性については、二重盲検法試験で科学的に証明されています。また、ホメオパシーの有効性を示すエビデンスは山ほどあります。それにもかかわらず、それを調査することは一切なく、非常に偏った意見だけを取り上げ、ホメオパシーは非科学的であるという前提での報道がまかり通る背景には、自分の目で見、自分の頭で考え、自分の感性で物事の価値を見極め、自分の良心にしたがって判断することを放棄し、真実や物事の価値基準を権威、マスコミや他人任せにしている反映があるのではないでしょうか？

それは私たち自身が自分の良心を放棄した結果ではないかと思うのです。だから責められるべきはマスコミではなく、マスコミの言うこと、インターネットで流れる情報をそのままに信じる私たちの無責任さなのです。つまり、私たちの無責任さの反映として、マスコミや、インターネット問題があるということなのです。

インターネットでの誹謗中傷はひどいものです。ホメオパシーだけでなく、もろもろについての誹謗中傷です。無記名の投稿で傷つけられた人しか、その痛みを理解することはできないでしょう。

しかし、その痛みの中で気づくことがあるのです。そして心底気づいた人は人を誹謗中傷することの愚かさを知り、何が人として大切なことであるかに気づくことができるでしょう。私も事実無根の誹謗中傷に傷つき苦しみました。悔し涙を流したことは一度や二度ではありません。しかし、その悔しさを、自分を変化させる糧としてきました。そして今そういうことに動じない自分となることができました。そして無益な争いを放棄しました。だから私は彼らに感謝しているのです。

変わらなければならないのは、何よりも自分です。マスコミを批判する前に、自分は事実を自ら正しく調査し、その結果を人に伝えているだろうか？　それを自問自答することです。自分の思い込みを人に伝えていないだろうか？　物事を正確に伝えただろ

うか？　自分の都合のよいように事実をねじ曲げて伝えていないだろうか？　誰かを悪者に仕立て上げ批判したことはなかっただろうか？　誰かをいじめようとしなかっただろうか？　正直に誠実に愛をもって生きてきただろうか？

だから私はマスコミやインターネットがもっともっと暴走し、それによる被害者がどんどん広がることで多くの人が大切なことに気づくなら、それもよいのではないかと思うようになりました。

何が正しいことなのだろう、何が自然なことなのだろう、何が大切なことなのだろうという問題意識を常にもち、世間一般で言われていることに疑問をもつようになる人が増え、自分で真実を見つけようとする人が増えたなら、きっとやがて誰もがマスコミの言うことやインターネットで言われていることが必ずしも正しいことではないと知り、自分で考えるようになるだろうと思います。

そして人の評判や評価を気にすることもなくなるでしょう。ゴシップ情報で利益がもたらされるような世の中であり、事実を正確に伝えるよりも、おもしろおかしく取り上げることで利益がもたらされる世の中である限り、つまり私たちがそのようなものを求めている限り、何も変わらないということなのです。

そうであるならば、多くの人が変わることができるように、多くの人がマスコミやインターネットの被害者となり、そのなかで大切なことに気づく人が増えるなら、それでもよいと思うのです。一人ひとりの意識のあり方、考え方が変化するにつれて、つまり求めるものが変化するにつれて、マスコミ報道のあり方も変化してくるでしょうし、インターネットのあり方も変化してくると思うのです。

何かを力でねじ伏せようとしても何も変わりません。気づくことなく変えようとしても、何も変わらないのです。

最後に

来たる２０１１年10月、つくばに、世界30ヵ国以上

のホメオパシー関係者が集まり世界初のホメオパシー国際カンファレンス「世界のホメオパシー団体が日本で一つになる」が開催されます。

これは「日本ホメオパシー医学協会」(JPHMA)と「ホメオパシー国際評議会」(ICH)がジョイントして開催されるもので、1日目は日本人ホメオパスたちのダイナミックな治癒ケースの発表、2日目は海外で活躍しているホメオパスたちの日本と違ったアプローチの治癒ケースの発表、3日目は「ホメオパシーワールドフォーラム」でホメオパシーの世界基準会議が行われ、さまざまな国々のホメオパシーを知ることができます。

この国際カンファレンスは世界のホメオパシーの現状が見られる、またとないチャンスとなります。一般の方も参加できますので、皆さまぜひ足をお運びください。

日程は、2011年10月8日(土)、9日(日)、10日(月・祝)です。お待ちしています。

今回、このような執筆の機会を頂きましたことに対して、心から感謝しております。

ありがとうございました。

【由井寅子氏 著書のご案内】

『インナーチャイルドが叫んでる!』
ホメオパシー出版
価格1,500円(税別)

『予防接種トンデモ論 ―病原体はありがたい! 子どものかかる病気はありがたい!』
ホメオパシー出版
価格1,500円(税別)

『とらこ先生通信』
ホメオパシー出版
価格1,600円(税別)

『発達障害へのホメオパシー的アプローチ―発達障害の子どもたちを治癒に導く方法論と症例集』
ホメオパシー出版
価格1,300円(税別)

質問コーナー

**由井寅子先生のホメオパシーをさらにご理解いただくために、
質問コーナーを設けました。**

＋＋

【質問1】

赤ちゃんのときに受ける予防接種について、寅子先生のお考えを再確認させていただきたく存じます。私はかつて子どもたちに良かれと思って予防接種を受けさせていた親でした。しかしいまは予防接種の危険を認識するようになり、インフルエンザの予防接種も反対派に転じています。

ただ、これから授かる赤ちゃんに、ポリオの予防接種も受けさせないか？　と聞かれると、正直、迷いが生じます……。と申しますのは、昭和４年生まれの伯父、同じく同年生まれの父の従姉妹が小児麻痺（ポリオ）の後遺症で不自由であった姿を見ていたため、そのような流行があった場合にも予防接種は受けないほうがいいのか？　という疑問が私自身の中に残ってしまうのです。

予防接種に替わるもっと良い方法があるのか？　寅子先生のお考えをお聞かせください。

＋＋

【回　答】

「ワクチンの害を知って予防接種は受けたくないが、子どものかかる病気も怖い。私はどうしたらよいのでしょう」といった質問を受けることがありますが、それについては、自分自身で判断してもらうしかありません。

ただし、予防接種とは何なのか、事実や情報をもっていない段階では、正しい判断ができませんので、まずは情報収集することです。その一環として、ぜひ拙著『予防接種トンデモ論』もお読みいただければと思います。

次に得た情報を吟味し理解することです。たとえば、予防接種が病気を予防していると言われていますが、その実態はどうなのか、子どもが病気にかかることの意味は何なのかといったことを理解することがとても重要です。

例えば、ポリオは、今では自然に感染し発症することはほとんどなく、逆に予防接種の副反応としてポリオを発症するケースがほとんどです。これはポリオのワクチンが生ワクチンであることと、抗生物質を含むため腸内細菌のバランスを崩し免疫が低下するためです。また感染症の流行があったとしても全員がかかるわけではありません。かかるか、かからないかの違いや重症になるかどうかは、

(▼161ページの続き)

結局ご本人の免疫力の違いによります。ですから免疫力を高める方向で予防を考えることが健全だと思います。

大事なことは、マスコミなどで歪められて報道されている健康情報を鵜呑みにせず、そもそも病気とは何なのかといった基本的なことから学んで頂くことが大切であると考えます。

その上で、子どもに予防接種を受けさせるか受けさせないかの判断に迷うとしたら、それはその人の病気に対する恐怖がそれだけ強いということでしょうから、そういう人は予防接種を受けさせたらよいのです。そのとき大事なことは予防接種をするときに罪悪感をもたないことです。そして予防接種の害が気になる場合や万一、予防接種を受けて副反応が出てしまった場合は、ホメオパシーでの対処をすればよいのです。

このように予防接種を受ける受けないの判断は、人に委ねるのではなく、自身が責任を持って行うことが最も大事です。

またホメオパシーにも予防方法はありますので検討する価値があります。これは予防したい感染症の病原体を希釈振盪(きしゃくしんとう)したノゾーズと言われるレメディーをとる方法です。たとえば、はしか予防には、はしかウイルスから作られたレメディーをとります。詳細は拙著『ホメオパシーガイドブック⑥予防』をお読みください。だからと言って絶対にその感染症にかからないというわけではありません。かかる必要がある場合はかかります。

このホメオパシーで感染症を予防できるのではないかという概念は、その科学的メカニズムは解明されていないものの、ホメオパシーの創始者ハーネマンのときからありました。病原体が感染する原因をあらかじめレメディーで取り除くことができれば、感染しないということです。ホメオパシーでは感染症はかかる要素があるからかかるのであり、もしかかりたくなければ、日々、体に老廃物、毒物を入れないような食生活、生活習慣を取り入れることです。また万一、熱や炎症が出た場合は、薬で抑えず、熱や炎症を出し切り、体をきれいな状態にしておくことです。

ちなみにホメオパシー的予防の有効性は、キューバの国家プロジェクトの結果でも証明されています(Bracho G, Varela E, Fernandez R, Ordaz B, Marzoa N, Menendez J, Garcia L, Gilling E, Leyva R, Rufin R, de la Torre R, Solis RL, Batista N, Borrero R, Campa C. Large-scale application of highly-diluted bacteria for Leptospirosis epidemic control. Homeopathy, 2010; 99 : 156-166.)。

質問コーナー

(▼162ページの続き)

毎年、キューバでは、ハリケーンにより地方が洪水に見舞われ水汚染が高まる時期にレプトスピラ症が流行し、その対策として、2007年まではキューバの保険省は現代医学によるレプトのワクチンを配給していたが、2007年8月から、3つの州の全人口250万人に、ホメオパシーの予防ノゾーズに精神的な苦悩を和らげるバッチフラワーレメディーを加えたものを投与してきました。

2週間の間隔で、1人2回投与（つまり500万回の投与）。費用は現代医学の予防接種の300万米ドルに比べて、たったの20万米ドル。ワクチンが使われていたときも感染者は毎年増加し、何千人という単位でしたが、2007年8月からたった2週間で、感染者の数が0～10人になり、死亡者数は0人。2008年には死亡者数0人、感染者数も毎月10人以下となりました。

このキューバでのワクチンの代わりにホメオパシーのレメディーを使った成果によって、予防医学の歴史が変わるだろうと言われています。

＋＋

【質問2】

予防接種の害を減じるレメディーをとって、体内から本当に害がなくなったという確証は、どこでわかるのですか?

＋＋

【回　答】

ワクチンのレメディーで好転反応（排泄反応）が生じたとしたら、同種の原理に基づき、ワクチンが悪さをしていたということを意味しますが、排泄反応の結果、体調が改善されたり、精神が安定したり心が楽になったりしたら、それはとりもなおさずワクチンの害が排泄された証左と言えるのではないでしょうか。

自閉症などのケースで、ワクチンやワクチンにも含まれている水銀やアルミナなどを希釈振盪（きしょくしんとう）したレメディーをとると、毛髪検査の結果、それらの重金属の排出が増えた検査データなどを見せてくれるお母さんもいらっしゃいます。自己治癒力が触発されて異物の排出が高まった結果ではないかと考えます。

なお、予防接種の害が今どれくらい体の中に残っているかを正確に測定することは大変難しい課題です。一つの目安として、血液中の「IgM・IgG抗体価」が考えられるでしょう。しかし、どれだけ体内から予防接種の害がなくなったのかを知るより、もとからあった病気がどれだけ治癒し、どれだけ元気になり、どれだけ自分らしく生きられるようになったかが大事であると考えます。